

潮騒

いつの時代も、人は海の恵みをうけて暮らしてきました。海でとれる魚介類をはじめ、釣りやサーフィンなどのレジャーによる楽しみ、雄大な自然景観から感じる感動や癒しなど、恵みの種類は様々です。その一方で、嵐や津波など、海は時に荒々しい顔をみせることもあります。そんな海に対して、人は様々な想いをいだいてきました。海に面した表浜地域の人たちの、海に対する想いについて、少し考えてみましょう。

CONTENTS

目次

- 特集「海への想い」.....P.1
- 表浜むかし話「広吉じいの大松」.....P.5
- 協議会の活動報告.....P.6
- 平成20年度事業計画.....P.7



海への想い

海に面した表浜地域では、海と深い関わりを持って生活してきました。
それぞれの時代の海への想いから、暮らし方や海との関わり方の変化がみえてきます。

❖ 過去

昭和20年代までの表浜地域は漁業が盛んで、大草から久美原までの間に18もの網が存在し、専門の漁師もたくさんいました。漁は、天候や魚の回遊状況に左右されるのに加え、太平洋の荒波の中、小型の船での作業は危険と隣り合わせです。人は海に神の存在を感じ、豊漁や安全を祈ったのではないのでしょうか。今に残る、往時の人の想いをご紹介します。

● 長仙寺の玉取祭

長 仙寺で「玉取神事」が行われるようになったのは、明治初期のことと言われています。現在も厄除け、開運を願う人が多く参加する「玉取神事」ですが、往時は、表浜十三里の網を中心として、網子連がその所属の網の名誉にかけて取り合いをしたものでした。

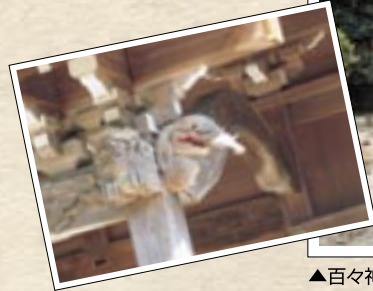
境内に投げ入れられた直径8cm程の糸鞠を拾った者は、神の恩恵により、海上での安全と大漁を得て、幸を受けることができると信じられていました。そのため、「玉取」は網の名誉をかけた、現在とは比べものにならない激しいものであったそうです。境内中を走り回り、裏山の墓地や、池の中にまで入り、ついに玉を見失い、お流れとなった年もあったということです。

今は、漁業で生計を立てる人もいなくなり、「玉取神事」の様子も変わってしまいましたが、長仙寺の東にある魚鱗塔に刻まれた網元たちの名前に、往時の面影を感じることができます。



● 百々神社の石灯籠

神社の石灯籠には、寄進者が祈願する言葉が彫られていることが多くあります。一般的には、「家内安全」「商売繁盛」などの言葉が多いですが、百々神社の石灯籠には、「船中安全」の文字が彫られています。



▲百々神社の石灯籠

漁と信心

●大草 伊藤あい子さん 昭和16年作成の文集「半島渥美」より抜粋

どうどうたる荒い波風を相手にして働く浜の人は荒々しい気性を持っているが、反面、信仰心が非常に強い。大漁の時はどんな寒中でも海の中に飛び込んで体を清め、裸のままで、ぴんぴんおどる大魚を二三匹持ってお宮まで掛声勇ましく裸参りというのをやる。村の人達はその裸参りの声を聞いて大漁を知り、我も我もと浜へ魚を貰いに行く。骨折って引上げた魚もたくさんあれば、惜し気もなく村の人にくれてやる。大漁のときは漁があったと言って神様へお礼参りをし、不漁が続くとお宮へお籠りをして信心する。毎年盆と正月の二回とった魚の大施餓鬼をして供養をする。又どの船にも御霊様を祭りその上上がることを絶対にせぬ。又、網の中央を知るため大きな浮をつけるが、これを絶対またがない。網仲間の人がまたがないばかりでなく、子どもが知らずにまたいでも大声で叱られる。もしこれがけがされると漁がないと信仰しているからである。

網元になると神様のお祭りをするために決して肥料にするものなどに手をつけない。こうして大漁も不漁も神の御心のままにという信仰が強いのである。

● 海は学校

生活の中心であった海は、信仰の対象であるとともに、子どもたちにとっては遊び場でもありました。

子ども同士の集団遊びや、大人の仕事振りを間近に見ることにより、社会性を学ぶ学校としての役割も果たしていたのではないのでしょうか。



表浜で遊んだ記憶。



きめた
鈴木 砧さん

昔は、大人は仕事で忙しいため、年長者が小さい子の面倒をみるのが当たり前のことでした。上は15才から下は3才くらいまでの子どもが一緒になって遊んでいました。夏は表浜で一日中泳いでいることが多かったです。すぐ横で大人が漁の仕事をしている時には、その仕事振りをみたり、取れた魚を貰ったりしたものです。



はかる
鈴木 計さん

潮の流れが速く、危険な場所は年長者が知っていて、近づかないように教えてくれました。流された場合には、流れに逆らってはいけないと教えられていました。小学6年生の時に、離岸流に流され、沖合いまで流されましたが、教えてもらったとおりにして無事に岸まで戻ることができました。

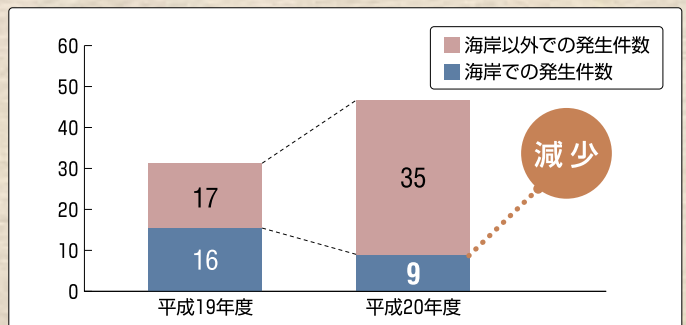
❖ 現在

漁業の不振や豊川用水通水後の農業発展により、今ではこの地域に漁業により生計をたてる人はいなくなりました。海は、生活の糧を得る場から、釣りやサーフィンなどのレジャー活動の場へと変化しました。豊漁や操業中の安全を神に祈る気持ちは、海岸を安全に利用するための活動や、自然環境を守ろうという行動へとその形を変えています。

● 安全な海岸利用に向けて

楽しいはずのサーフィン。でも、毎年、沖に流されて帰れないという事故が発生しています。この沖に流される原因というのが離岸流です。離岸流は沖から来た波が岸に到達した後、岸辺に溜まった海水が一定の場所からまとまって沖に戻る流れのことで、とても強い流れのため、いったんこの流れに乗ってしまうと、逆らって泳ぐことは困難だといわれています。表浜海岸でも、海上保安本部が、発生状況調査を実施し、海岸利用者に対し事故防止を呼びかけています。

海岸を利用している間に、車上狙いの被害にあう事例が多く発生しています。昨年度は33件の被害が発生し、そのうち16件が表浜での被害となっています。こうした状況の中、海岸を安心して利用できるように、ボランティアによる取組みが始まっており、警察と連携して、安全パトロールや防犯情報の発信を行っています。こうした地元の取組みにより、海岸での車上狙いの被害件数は昨年より減っています。



▲田原警察署管内での車上ねらい発生件数

● すばらしい自然を未来に

地域の人の暮らしが海から離れ、自然への敬意が薄れた結果、海を利用するマナーも低下してしまったのではないのでしょうか。海岸へゴミを捨てる、砂浜へ車を乗り入れるなどの行為は、景観の悪化にとどまらず、保護すべき貴重な動植物にも影響を与えています。

このような状況のなか、きれいな砂浜を次の世代に残すために、ボランティアによる清掃活動が盛んに行われるようになってきました。ウミガメなどの動植物を保護するために、表浜一帯では車両の乗り入れ規制も行われています。

地域の貴重な財産である海を、人に親しまれる、なくてはならない存在として、次の世代に引き継ぐことが、我々の果たすべき責任なのではないでしょうか。



▲ビーチクリーン活動 (H19.11撮影)



▲産卵にやってきたウミガメ (大草町 田中良一さん撮影 H20.7)

私たち「安全波乗隊」です。

安全波乗隊

SAFETY SURFER CLUB

海岸での防犯・事故防止のために、表浜海岸一帯のパトロールを行う団体、「安全波乗隊」が結成されました。代表の加藤昌高さんにお話を伺いました。

—活動をはじめたきっかけは

表浜海岸一帯では、車上狙いの被害が多く発生しています。去年は30件を超える被害があり、その半数近くが車の施錠などの防犯対策をしていない状況でした。また、初心者のサーファーが離岸流により沖合いまで流される事故も数多く発生しています。このような現状をみて、何とかしなきゃと思いました。自分たちができることは何かを仲間で相談して、この活動をはじめました。



安全波乗隊 代表
加藤 昌高さん

—活動をはじめて、海を訪れる人に変化はありますか

サーファーの多くは、波の情報を携帯サイトから入手しています。そのサイトに防犯・事故情報を発信することで、最近「安全波乗隊」の認知度も少しずつあがってきました。こちらからの声かけに反応してくれる人や情報を提供してくれる人も増えてきました。海岸利用者の防犯・事故防止に対する意識は確実に向上していると思います。

—「安全波乗隊」の隊員になるにはどうすればいいですか

ボランティア活動なので、特別な資格等は必要ありません。隊員は各自の都合のつく時間に活動をしているので、時間についても指定はありません。趣旨に賛同してもらえる方はいつでも歓迎します。パトロール中の姿を見かけたら気軽に声をかけてください。



▲安全波乗隊の隊員

—田原の海の印象は

これまで日本中の海を見てきましたが、田原の海は自然が残っていて水質もいい。海の中でウミガメやスナメリに会えることもあります。駐車場やトイレなどの施設も整備されているし、全国的にも稀な、素晴らしい海だと思います。砂浜も、ゴミを捨てないという意識が高まり、ビーチクリーン活動も広がってきたため、昔と比べてきれいになったと思います。

—海を訪れる人へのメッセージ

同じ海岸利用者でも、サーファーと釣り人では、海の利用をめぐるトラブルとなることもしばしばあります。今後お互いが納得できるようなルールができればいいと思います。会話することで理解しあえる部分もあるので、コミュニケーションを大切にしたいです。海岸を訪れる人が海に愛着を持ち、利用者同士はもちろん、地域の人たちと理解しながら、この素晴らしい海を楽しく利用していければいいと思います。

「広吉じいの大松」

山田もと

ながい年月、あらしにも、日でりにもまけず、生きつづけた木、わたしたちを、じっと見つづけている木、そんな木をたずねてみたいと思います。

田原町大草志田の農家に、天をつくように、まっすぐのびた、大きな松の木があります。

安政三年生れの広吉じいが、十五、六の時、家のまわりに築土^{ついで}*1をつくるため、ちかくのかご池から、土をはこんできました。ふみかためていると、土の中に、めをだしたばかりの、三センチほどの松がありました。なにげなくふみつけてはみたものの、

「さてよ。」

広吉じいは、思いなおして、そのめをおこし、うえなおしておきました。

何年目かー

ついじ^{*}の草の中から、すんとめをのばしている、松をみつけました。

「やれ、お前は生きとったか。」

広吉じいは、かわいく思って、ねもとの草をとってやりました。

松はついじの上でずんずん大きくなり、広吉じいのせいをこし、やねをこして、あたりの木もおいぬいて、まっすぐのびつづけ、広吉じいのじまんの大松になりました。

昭和十四年、広吉じいが死んだ時には、二かかえにもなっていました。

むすこの定じいは、木のぼりがとくいで、高いところまで、よく枝打ちをしたので、松はみごとに、まっすぐのびつづけました。

いせわん大ふうの時、山かげのしゃめんにある杉は、

ねこそぎたおれましたが、一ばん心配した、この大松はぶじでした。定じいは、

「たいした松よの。ふだんの風あたりで、ちゃんと心がまえができとるだ。あの杉は、ふだんぬくぬくしとったでひとたまりもなかっただ。」

とって、ついじから、はみだしている、大松の根をなでていました。

その定じいも死に、今は孫の耕にいと、ひこ^{*2}のたかくんにみまもられながら、そうそうと風の音をたてています。



* 1【築地】:土だけをつき固めた土塀。

* 2【ひこ】:孫の子。ひまご。

「みんなで考え・行動する地域づくり」

田原市東部太平洋岸総合整備促進協議会の概要

会長あいさつ

本協議会も発足以来10年を経過し、東部、神戸、大草、六連の4校区が一丸となった活動によって、少しずつ自立した地区活動が行われ、一部では成果が形となって参りました。

本協議会は、中学校区単位での活動という他に例のない特徴的な取組みとして、今後の田原市における地域づくりのモデルとなるものと自負しています。

市民と行政の協働が求められる中、今後も、4校区のつながりをより深くするとともに、他の表浜地域との連携も視野に入れながら、行政と一体となった効果的な太平洋岸の整備促進を図るよう、努めて参りたいと思います。

田原市東部太平洋岸総合整備促進協議会

会長 多田辰郎

協議会活動の経過

H8.1	協議会発足
H8.3	沿岸部に関する地元要望作成
H9.3	基本構想「サングリーン21」策定
方向性	・自然環境の保全と活用 ・農業基盤、農村環境の整備 ・観光・レクリエーション施設の整備 ・幹線道路の整備
展開	・太平洋岸の魅力を発信するイベントの開催 ・海浜・崖森・農地エリアのエリア別の整備促進 ・渥美半島全体の連絡調整 ・関係機関への要望運動等の展開
H9.11	専門部会設置
H10.3	海浜・崖森エリアの基本計画策定
H10.10	農地エリア整備の地元検討書作成
H10.11	第1回表浜自然ふれあいフェスティバル開催(以後毎年開催)
H14.9	環境保全啓発看板の設置(大草海岸を始め6箇所の海岸に設置)
H14.11	海浜拠点整備地区の選定(谷ノ口地区)
H15.3	ええZONEガーデン整備計画策定(谷ノ口総合整備促進協議会)
H16.7	国土交通省事業 - 地域振興アドバイザーを受け入れ(")
H17.3	谷ノ口地区整備基本計画策定(")

協議会組織 [平成20年9月現在・順不同]

役員	会長	多田辰郎(六連校区総代)
	副会長	高橋昭好(東部校区総代) 大羽敏(神戸校区総代) 村瀬精彦(大草校区総代)
委員	市議会議員	伊与田知養、赤尾昌昭、彦坂雄三、角谷敏夫
	漁業関係者	富田寛(神戸漁業協同組合長) 松井一光(六連漁業協同組合長)
	市農業委員	細井儀宣、三浦重芳、富田政彦、清水一美
	市役所	菰田信幸(副市長) 川口侃(教育長) 菰田敏則(経済部長) 林勇夫(建設部長) 讃岐俊宣(都市整備部長)
	顧問	鈴木克幸(田原市長) 鈴木愿(愛知県議会議員) 伊藤欣夫(愛知みなみ農業協同組合代表理事組合長)
	事務局	田原市役所総務部(企画課) 八木学(総務部長)

表浜自然ふれあいガーデン 実現に向けての動き

ハード事業

海岸整備(県事業)

海岸保全事業(傾斜護岸): 百々海岸(H19) 離岸堤調査(豊橋田原海岸) 海岸治山事業: 8箇所要望中

拠点地区の整備促進(市事業)

公衆便所整備事業: 谷ノ口海岸(H9)・大草海岸(H10)・百々海岸(H11)・東ヶ谷海岸(H13)

海岸駐車場事業: 大草海岸(H11)・百々海岸(H12)

道路整備事業: 南谷ノ口1号線改良(H15)・寺前上り口線拡張(H16~H18)・高畑谷ノ口線改良

(H17)・谷ノ口海岸線拡張(H17~)・R42公民館前交差点改良(H18)

公園整備事業:(仮称)谷ノ口森林レクリエーション公園整備(H18~)

ソフト事業

表浜自然ふれあいフェスティバル(協議会事業)

メイン海岸: H10谷ノ口海岸・H11大草海岸・H12百々海岸・H13東ヶ谷海岸・H14大草海岸・H15百々海岸・H16分散開催・H17大草海岸・H18百々海岸・H19東ヶ谷海岸

表浜のレクリエーション

健康ウォーキング大会(市教育委員会): H10東ヶ谷海岸・H11大草海岸・H14谷ノ口海岸・H15百々海岸

ふれあいウォーキング大会(六連青少年健全育成): H13六連海岸

多額の予算を必要とする海岸保全事業の継続的な実施には、国土保全・防災面に加え、表浜海岸の持つ多面的価値の創造を行い、投資効果の向上を図る必要があります。

農地エリアの整備 実現に向けての動き

ハード事業

農村・農地の整備(市事業)

農村総合整備: 神戸地区(H12~H16)・大草、高松地区(H18~)・東部地区(H19~)

農用地基盤整備事業: 谷熊新田排水対策(H20~) 農地・水・環境保全向上対策

ソフト事業

農地基盤に関する実態調査(市事業)

農地基盤再整備に関する調査: H11表浜全域

道路・排水・農地区画・ため池などの農業基盤に加え、集落環境を含め総合的な整備促進を図ります。

表浜BLUEWALK ~ 表浜ブルーウォーク ~ H20.8.9 ~ 8.16実施



ボランティアグループ「虹のとびら」



海岸を歩きながらの清掃活動

平成19年からボランティアグループ「虹のとびら」が中心となって、豊橋市の東細谷海岸から伊良湖岬までの表浜海岸50kmを、8日間連続で歩きながら海岸清掃する活動、「表浜BLUEWALK」を始めました。

豊かな自然が残る表浜海岸ですが、多くのゴミにより景観や自然環境を損ねている現状を知り、自分たちで実際に清掃活動を行うと同時に、話題性のある企画をすることで、多くの人に関心を持ってもらおうと思いました。参加者は200名ほどで、学生が中心ですが、海岸を利用しているサーファーや地域の住民の方も参加してくれています。田原市の海岸も清掃するので、皆さんぜひ参加してください。

8月の暑い盛りに、50kmも海岸を歩きながら清掃活動をするのは、体力的にもつらいことですが、自然のすばらしさを感じたり、参加者同士の仲間意識が芽生えたりと、充実感を味わっています。

ゴミを捨てる人よりも、ゴミを拾う人が増えることを祈って、この活動をこれからも続けていきたいと考えています。

詳細は、「表浜ブルーウォークブログ」をご覧ください。

○ <http://ameblo.jp/omotehama.bluewalk/>

平成20年度事業計画

主要事業

第11回表浜自然ふれあいフェスティバル

日時 平成20年9月28日(日)

午前9時～午後1時

悪天候の場合は11月24日(祝・月)に延期

場所 久美原～大草の表浜一帯

親睦会場は大草海岸

内容 海岸清掃、地引網(予定)、ビーチフラッグス、特産鍋の無料提供ほか

目的 表浜海岸の魅力、海岸侵食などの現状を広くPRすることで海岸整備の促進を図る

推進事業

農村総合整備事業

[大草・高松地区・東部地区]: 田原市役所経済部農政課

海岸治山事業: 愛知県東三河農林水産事務所

海岸護岸整備 百々海岸]: 愛知県東三河建設事務所

海岸進入道路整備 谷ノ口地区]: 田原市建設部土木課

森林公園計画 谷ノ口地区]: 田原市都市整備部公園緑地課

沿道花壇整備 谷ノ口地区]: 田原市都市整備部公園緑地課

第10回 表浜自然ふれあい フェスティバル

H19
11.10
開催



あいにくの天候でしたが、約2000名の参加者が、久美原海岸～大草海岸までの海岸清掃・ごみ拾いを実施しました。参加者たちは、清掃活動後の親睦会場となった東ヶ谷海岸で、地域の女性が振る舞った無料の特産鍋に舌鼓を打ちながら、交流を深めました。

表浜情報誌「潮騒」や「協議会活動」に対するご意見・ご要望・ご感想をお寄せください。

【発行】田原市東部太平洋岸総合整備促進協議会(事務局: 田原市役所企画課) 〒441-3492 愛知県田原市田原町南番場30-1 TEL 0531-23-3507

この冊子は再生紙を使用しています。